

働く人たちや一般庶民に共感を持ってないようでは、 どうしてほんとうの学問や技術を発展させること ができるだろうか。

医師不足から、医療が崩壊の危

中で次のように述べている。

機に瀕しているというところで、大騒ぎになっているが、こんなことは今に始まったことではない。佐久病院の周辺でも、50年ほど前は無医村が10を越すほどあったし、それを解消するために市町村も病院もどんなに苦勞したことが。

今回の医療危機で、国は医科大学の定員を増やすことにしたが、しかしこれで、本当に農村やへき地に行く医師が増えるかという

と、今のような医師教育が続いている限り、そうはいくまい。

では、どんな教育をすればよいのか。若月先生は40年前に、将来のことを見据えて、「農村医科大學構想」を提案したのだが、その

従来の医学は、あまりにも治療

にかたよっていた。予防、あるいは、リハビリテーション（社会復帰）の方面の努力が薄かった。これからはこれを大きく補正しなければならぬ。それには医学が民衆の方向に向きをかえなければ駄目である。医学は民衆のためにある。

そこで、そのための教育が特に大事となるが、私は、教養課程で学生たちといっしょに暮らすことが何より大切と思っている。そして、学生たちを寄宿舎に住まわすよりも、できたら農家に住んでもらおうと思っている。各自、農家



まつしましろうすい
松島松翠
(佐久総合病院名誉院長)

に民宿である。そして、その目で

農村の現実を見てもらいたい。医者かもしれないが、手伝っていけないというわけでもないであろう。何も隣の中国の「はだしの医者」のまねをするわけではないが、とにかくそうして、働く農民たちにシンパシーを持つようなインテリ



ゲンチャーをつくりたいと思う。働く人たちや一般庶民に共感を持ってないようでは、どうしてほんとうの学問や技術を発展させることができるであろうか。私が農村医科大学をこの信州の山の中につくりたいという根拠は、まさにその点にある。

いろいろな解釈は頭のいい人から出来るであろうが、技術や学問をもって、ほんとうの実践（社会的）を行なうには、長い苦しい戦いが必要なので、それには民衆に対する「愛」がなければかなわぬことだと思っております。（『望星』第3巻第8号、一九七二、『若月俊一の遺言』家の光協会、二〇〇七）

農村やへき地で長く活躍してもらう医師を育て、民衆のための学問や技術を発展させるには、農村の現場の中で、農民に対するシンパシー（共感、思いやり）や「愛」を育てる教育が基本であると、若月先生は言っているのである。